

安倍晋三内閣総理大臣殿

新国立競技場計画発表を受けての緊急提言

国立競技場跡地はレガシーの森に、

2020 東京オリンピックは既存スタジアム改修で！

新国立競技場の新たな計画が28日、第三者委員会の検証結果を待たずに関係閣僚会議から発表された。しかしこれはザハ・ハディド案こそあきらめたものの、決定の仕方も内容も旧態依然としており、このままでは再び同様の暴走を繰り返す危険性が高い。

以下、神宮外苑と国立競技場を未来へ手わたす会の見解を述べる。

1. 延床面積は22万平米から19.5万平米に減っているが、それでも敷地面積から見て巨大すぎる。この敷地に巨大な競技場をつくることに無理があることは、歴史的にも多くの識者が指摘している。また将来の増席の理由とされるサッカーワールドカップ開催は最短で18年後のこととされ、FIFA会長が以前、横浜・日産スタジアムで問題ないと発言したこともあり、現時点で考慮する必要はない。
2. 1,550億円の建設費を970億円の削減とするのは数字上のごまかしであり、当初予算1,300億円からすると250億円の増額である。今後さらに増える可能性、その維持や改修が少子化世代にツケとなる可能性が大きい。
3. 無能力無責任が国民の前に明らかにされたJSC（日本スポーツ振興センター）は、国民の信頼を深く傷つけたのだから、すみやかにこの事業主体から手を引かせるべきである。
4. 景観に配慮、環境に調和、和風らしさ、などの文言が見うけられるが、その内容が明らかではない。白紙撤回になった以上、旧案のために行われた神宮外苑周辺の地区計画決定、都営霞ヶ丘アパートの廃止、区道廃止、JSC本部ビルの建て替え計画も白紙に戻すべきである。
5. アスリートの声を聞くのはいいが、「アスリートファーストの前に国民ファースト」が前提である。エリートスポーツのためだけに膨大な国費を使うのではなく、むしろスポーツの裾野を広げ、市民の健康に寄与するものであってほしい。工事の騒音や景観の影響を蒙る近隣住民はもちろん、ステークホルダーであり、オーナーであり、タックスペイヤーである国民の暮らしや多様なニーズが最優先されることが枢要だ。

6. 提示された設計期間も工期も大幅に短縮され、これでは本当に国民が納得し誇りに思える競技場ができるのだろうか。すでに東京周辺では「オリンピックまでに」のかけ声でたくさんの工事が行なわれ、これでさらに競技場建設を最優先すればますます東北から資材・人材を奪うことになる。これは招致の際の目的「東北の復興する姿を見せる」とは明らかに背馳する。

以上のことから当会は2020年オリンピックのために、神宮外苑に新たな巨大スタジアムは必要ないと考える。

1000兆の赤字を持つわが国で、いま、拙速に、新たなスタジアムを建てようとしても祝福されるものにはならないだろう。2020年オリンピックには、IOCのアジェンダにのっとり、既存スタジアムを改修して使う事こそが国民を幸せにする、最も合理的な判断であろう。

これは国民も交えた論議の末、しかるべき土地を選んで真の国立競技場を作ることに反対しているわけではない。

神宮外苑の競技場跡は1964年オリンピック記念公園として、1943年の出陣学徒壮行会や1964年オリンピックレガシーを引き継いでいく。日本学術会議の提言を参考に緑化を図り、渋谷川を復活し、市民の安らぎと思案の場、ピクニック、ジョギング、自転車練習など今まで使われてきた用途をいかして再生していただきたい。それは高層ビルが林立する東京で、風の道を確保してヒートアイランド化を回避するための最善の方策でもあろう。

以上提言する。

2015年9月1日

補足・どこが白紙撤回なのか？

同じ9月1日、JSCによる新しいコンクールの応募要項が発表されたが、敷地、人工地盤なども変わりがなく、これではザハ案マイナス屋根にならないかと危惧される。いったんは文部科学省は都営霞ヶ丘アパートを関連敷地とする事も白紙撤回のうちだと述べた。こうした事がうやむやのうちに事が運ばれようとしている。全く白紙撤回になっていないこのような応募要項は断固、認めるわけにはいかない。

神宮外苑と国立競技場を未来へ手わたす会